

都市・メディア・女給 初期成瀬巳喜男メロドラマにみるモダニティの経験

御園生 涼子

(UTCP、東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

1. 自動車事故 近代都市のショック経験

『限りなき舗道』(一九三四) 『生さぬ仲』(一九三二) 『夜ごとの夢』(一九三三)
一九三〇年代の成瀬作品の主人公たちを、モダニティの経験の主体として捉え直す、
あるいは成瀬のメロドラマ映画そのものを、モダニティの経験として浮かび上がらせる
「日常語としてのモダニズム vernacular modernism」
「感覚の反射的地平 sensory-reflexive horizon」(ミリアム・ハンセン)

2. 拡大するメディア 近代生活の言説とマス文化

大衆小説 新聞・出版メディアの成長
音声メディア レコード、ラジオの登場
広告媒体としての映画

3. 女給の物語 「近代」のレッスンとしてのメロドラマ映画

近代の表象形式としてのメロドラマ
「女給」という主体 道德律のドラマと消費文化へのファンタジー
『朝の並木道』(一九三六)

【引用集】

「大都市の交通のなかを動いてゆくことは、個々人にとって一連のショックと軋轢を生み出す。危険な交差点で、神経刺激の伝達がバッテリーからの刺激のように、次々と体をつらぬく。(・・・)このように技術は、人間の感覚器官に複雑な訓練を課した」(ヴァルター・ベンヤミン「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 近代の意味』、筑摩書房、449 - 450頁)

「『モダン』とは時代の先端を意味する。しかもその先端たるや、本質的生産的先端ではなく、末梢的消費的先端である。鋭く、細く、弱々しい先端である。とぎすまされた時代の神経である。新しいもの、珍しいものを最も鋭敏に感受して同時代人に伝える民族のアンテナである。(・・・)彼らは一様に、鋭敏な感受性と、軽い機知と、広くて浅い知識と、だぶだぶのずぼんまたは短いスカートと、細いステッキまたは太いパラソルと、毎月五枚ないし十枚ばかりの十円紙幣によってふくらませられる俸給袋以外になにもものをも持っていない。映画と、ジャズと、ダンスと、スポーツを通じて輸入されたモダニズムを生きているものは、すべてこの社会層に属する。(・・・)モダニズムには「昨日」もなければ「明日」もない。あるものはただ人口刺激によって強く感覚に印象されるせつながあるばかりである。「昨日」は記憶から駆逐しなければならぬ悪夢であり、「明日」はそれ自身なんの魅力をも約束しない砂漠である。」(大宅壮一「モダン層とモダン相」、大宅壮一全集・第二巻『モダン層とモダン相』、蒼洋社、5 - 8頁)

「日本人にとって、近代とは速度であり、ショックであり、センセーションのスペクタクルだった。こうした性質は、「モダン・ガール」「マルクス・ボーイ」やカフェのウェイトレスといった新しい主体についての言説の中で、しばしば誇張され象徴化された。それは、アイロンや写真、ラジオ、労働の負担を減ら

す台所用品、西洋風のスカートやズボン、新しい食品、「文化住宅」等々「快適性」「実用性」「経済性」を約束する新製品を喧伝する広告によって伝えられた。こうした商品はまた、階級やジェンダー、セクシュアリティを横断する新しいアイデンティティが獲得されたことも示していた。」(Harry Harootunian, *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*, Princeton University Press, p.18 邦訳 毛利嘉孝訳「近代による超克 - 両大戦間におけるファンタジー化される日常生活と社会体についての言説 - 」、『思想』1997年12月号、125頁)

「菊池や久米の通俗小説がベストセラーに進出するのは、それが映画という新しい媒体と結びついた大正末年から昭和初頭にかけてのことであつたらしい」「大正末年は文学と映画の相互交流の現象が顕著になった時期である。映画スターの魅力と相乗された作中人物の強力なイメージは、従来の読者が知らなかった新鮮な体験であった。『第二の接吻』の京子や『受難華』の寿美子は、それらが映画化され、筑波雪子や栗島すみ子によって演じられたときに、ヨリ広範な普及力を発揮する。映画という新しい映像芸術は、現実逃避の白昼夢を、小説以上に機能的、感覚的な形式で提供するのである。」(前田愛「大正後期通俗小説の展開」、『近代読者の成立』、岩波現代文庫、272頁、279頁)

「あなたは、夜の盛り場を、完全に、瞳孔を見開いて歩けるか。
電光の燦然として輝くところ、あなたの瞳孔は猫の眼のやうに、おのづから縮まらざるを得ないであらう。

活動写真の看板を^{あなう}圍繞する無数の電灯や、カフェーの表のネオン・サインは、近寄れば快い熱を感じさうにさへ思へる。又、ショーウインドーの商品を、瞬きもせず照す電光は、あかるい中にも落付いた感じを与へる。さればこそ、若い男は吸はれるやうにして、カフェーや活動写真館の中に姿を消し、美しい娘さんたちは、^{やもり}守宮のように硝子にくつゝいて、離れやうとはしない。

見渡せば、盛り場一帯は、天上の星よりも遙かに多数の電光で包まれ、今にも燃え出しさうに見える。その中を通れば袖も炎と化するであらう。」(村嶋歸之『大正・昭和の風俗批評と社会探訪 村嶋歸之著作選集 第一巻 カフェー考現学』、柏書房、25 - 26頁)

参考文献

- 前田愛「大正後期通俗小説の展開」、『近代読者の成立』、岩波現代文庫、二〇〇一年
南博/社会心理研究所『大正文化』、勁草書房、一九六五年、『昭和文化』、勁草書房、一九八七年
村嶋歸之『大正・昭和の風俗批評と社会探訪 村嶋歸之著作選集 第一巻 カフェー考現学』、柏書房、二〇〇四年
ジークフリート・クラカウアー著・船戸満之/野村美紀子訳『大衆の装飾』、法政大学出版局、一九九六年
ピーター・ブルックス著・四方田犬彦・木村慧子訳『メロドラマ的想像力』、産業図書、二〇〇二年
ヴァルター・ベンヤミン著・浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 近代の意味』、筑摩書房、一九九五年
Miriam Bratu Hansen, "The Mass Production of the Senses: Classical Cinema as Vernacular Modernism," in *Reinventing Film Studies*, eds. Christine Gledhill and Linda Williams, Arnold, 2000.
----, "Benjamin, Cinema and Experience: "The Blue Flower in the Land of Technology,"" *New German Critique* 40, Winter 1987.
Harry Harootunian, *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*, Princeton University Press, 2000.
Miriam Silverberg, "The Modern Girl as Militant", in *Recreating Japanese Women, 1600-1945*, ed. Gail Lee Bernstein, University of California Press, 1991.
----, 庄司則子訳「日本の女給はブルースを歌った」、脇田晴子、S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史・下 主体と表現、仕事と生活』、東京大学出版会、一九九五年
Ben Singer, *Melodrama and Modernity: Early Sensational Cinema and Its Contexts*, Columbia University Press,

2001. (本書第二章のもととなった論文の邦訳は長谷正人・中村秀之編訳『アンチ・スペクタクル』(東京大学出版会)所収)